

1月の行事報告 January

令和2年度 中原寺仏教壮年会総会のご案内 1月26日 総会/2時半 新年会/4時半



本年度も例年に倣い中原寺仏教壮年会は令和2年1月26日(日)14時半より中原寺本堂にて開催されました。

参加会員は19名、総会開催にあたり、14時より恒例の「お供茶式」が錦織門徒総代の御手前にて行われ、お勤めの後、14時半より総会が開催されました。

山奥壮年会会長より前年度活動報告、多田羅副会長より決算報告が行われ、横田会計監事による会計監査の承認がなされた後、中原寺仏教壮年会の年会費について、従来1名5,000円を3,000円に変更する旨、規約改定の議案が山奥会長より説明されました。

理由は壮年会の会員の高齢化に伴う経済的負担減と、婦人会の年会費と同額に合わせるのが趣旨であり、年会費減額による今後の活動費用のシュミレーションの説明も有り、全員一致の承認がなされました。

合わせて会費の使用適正化を図る為、個別補助金の内規も提案され、会計の透明性が明確となりました。

令和元年度は活動が不十分でしたので、本年度活動

方針では他寺交流等の具体的な計画を立て実行する旨の説明と、行事計画案並びに本年度予算案が提議され、壮年会規約第8条6項に基づき、全ての議案は出席者の過半数の賛同を得て承認され総会は終了しました事をご報告申し上げます。

なお、役員を担当業務について一部変更があります。多田羅副会長と石井理事は諸般の事情により業務執行が困難になりました。そこで住職と三役で検討の結果、入月氏と越田氏を理事に就任して頂くこととしました。この点は会員の皆様には事後承諾となりますが、ご了承の程、よろしくお願ひいたします。また横田理事は体調が思わしくなく、理事・会計監事を退任されました。

【追伸】ご承知のようにコロナ禍の影響でお寺の行事が全て停止になっています。壮年会も同様に活動ができない中、入月氏の提案・指導によりパソコンやスマホのメールやLINEを利用して、カレンダー「心に響くことば」の毎月の表題をテーマにした情報交換を始めました。詳細は二頁下段記事をご覧ください。またお寺ではYouTubeを活用して前住職の法話が配信されています。今後のお寺の活動が大きく変わる契機となる気がします。(多田羅 健二 記)

メール交流壮年会のメール交流について

この度の新型コロナウイルスによる感染を避けるべく、お寺の法要や壮年会等の集まりが制約されています。

このことに対応して『宿縁』3月号で、OA機器活用も必要との指摘がされました。

現在は中原寺HP、Facebookから発信されていますが、更にメールを使っての相互通信で交流が出来るようにと、一部有志で研究試行をはじめています。

交流のためのサイトはSNS上いろいろあるようですが、私達の年代層ではシンプルに会社等で一般的に使っている「メールアドレス」がベターとして、それぞれのアドレスを登録し「一斉送信で共有」する形で始めています。

テーマは手持ち資料が全員にある毎月発行の『宿縁』と毎月の『カレンダー法話』をベースにその他、時々話題などから取り上げています。提起されたテーマや質問に対して、それぞれが意見表明をして、続いて住職、前住職からお答え、法義を頂くという形で進めています。

言葉のやり取りといった対話と違い、文言をメール発信することは難しい面もありますが、逆に文章ならではの良い側面もたくさんあるように思います。

メール発信に不慣れ、抵抗感のある方にはFAX、手紙を中継して転載する方法も研究テストしています。また他のサイト(LINE、Twitter)からの転送もしています。

更に将来的なことではLINE 等のビデオ通話を利用することで、テレビ会議のように映像での「ご聴聞」も可能性があるとあります。

試行中ですがメールで「一緒に学ぶ御同朋」を募集しています。

◎下記までメール又はSMSで『メールアドレス』をお知らせ下さい。

パソコン又はスマートフォンで容量に余裕が必要です(旧タイプの携帯は難しい。)

○全員参加を目標にしています。……ご希望の方は下記連絡先にお電話下さい。

- ★LINE、Facebook、Twitter を利用中の方。(積極的な関与をお願いします)
- ★FAXで参加したい方。
- ★手紙で参加の方。

 提案者：入月 正
連絡先：090-8879-6606(SMS)
メールアドレス：irizuki@cosmos.ocn.ne.jp

感話
シリーズ-29

【結成40周年記念大会に参加して】



今年2月2日に築地本願寺蓮華殿において「これでいいのか～仏壮のおもい」というテーマで40年目の記念大会が行われました。南條了瑛布教師の「自信教人信にたずねる」という法話の後、静岡教學寺の南莊撰師の講話とシンポジウムが行なわれました。

南條了瑛布教師は「自信」とは本願力を聴聞することであり、「教人信」とは自分ではなく本願力が伝わり広めることであり、我々としては微力でも精一杯努力することが大切なのですと30分で簡潔に纏められ、お若いのに秀才という感じがしました。テーマについては教覺寺の自慢話みたいになってしまい、婦人会その他、皆で協力して工夫すればなんとかなる的な内容でした。

教覺寺は中原寺ともご縁が深く、小生も母の実家の手次寺で、お参りにも何度か行っており、ちょっと残念でした。

昭和63年に河口湖の研修に駆り出されてから、一門徒として壮年会について携わってきましたが、今回の集まりを見ても役割は終えたように思います。教団は当初、門信徒会運動の行き詰まりから、壮年会を創設し仏法をとおして社会に対する働きかけを、壮年中心に何とかしたいという思いが強かったように思います。しかし今は年寄りが多く力がありません。

創世期の頃の海老原理事長の頃は前住職もかなり力を入れておられ、中原寺から10名を超えて伊香保に研修に行ったこともあり。また基幹運動の推進という目的のもと壮年会単位を増やすため、活性化研究会などつくり僧侶と一体になって動いた時期もありました。

ただ仏壮が全国組織で連盟化になってからは形式に流れ、教団においても実践運動がはじまり組織を明確化してからは、総合研究所の創設・合同墓建立にみられるように、末寺の組織を動かすことよりも築地本願寺を中心とした中央突破の戦略に変わったように思います。連盟化になるときに、当時の下迫全国仏社会議長が危惧されたように、「仏教徒の社会参加が何故求められるのか、どんな社会が望ましいのかを論議することができるような活動」は棚上げになった感ももちました。

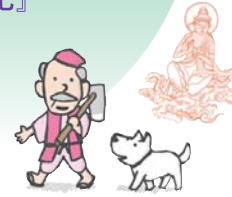
(越田 修二郎 記)

讃岐の妙好人/庄松さん

1799(寛政11年)–1871(明治4年)真宗興正派勝覚寺(東かがわ市三本松町)門徒

『ありのまの記』

- ◆法主「汝は信を頂いたか」
庄松「へエ頂きました」
法主「その得られた相を一言申せ」
庄松「なんともない」
法主「それで後生の覚悟はよいか」
庄松「それは阿弥陀さまに聞いたら早う分る、我の仕事じゃなし、我に聞いたとて分るものか」
法主「弥陀をたのむと云うもそれより他はない。……お前は正直な男じゃ」
- ◆ある人、庄松に向かって「隣村の鉄蔵は罪を犯して牢屋に



行き、終に牢死したのじゃが、今は何処へ行ったであろう、あんなものでも御浄土へ参られようか。

庄松答に「参れる参れる、おらさえ参れる」

◆ある役僧、庄松を困らせて恥しめんとて、三部経の中の下巻を取り出し、庄松に向かい、「お前は有難い同行さんじゃが、此大無量寿経の下巻の、此処の御文を読んでみよ」と云えば、庄松の答に、「庄松を助くるぞよ、助くるぞとかいてある」と云われたと。

◆富田村の菊蔵と勝覚寺へ参詣し、庄松が本堂で横に寝たれば、菊蔵これを咎めければ、庄松の曰く「親の内じゃ、遠慮には及ばぬ及ばぬ、そいうおまえは、義子であろう」

◆田中村森山勝次郎曰く「一念帰命とは、云何」と尋ねれば、庄松すぐに阿弥陀如来の御前にねころんで見せた。